
研究情報

第1回 アジア作物学会議に出席して

西山 岩 男

(東北農業試験場)

アジア作物学会 (The Asian Crop Science Association, ACSA) と韓国作物学会との共催である第1回のアジア作物学会議 (The First Asian Crop Science Conference) が、1992年9月24~28日に韓国、ソウルのオリンピックパークテルを会場として開催された。この会議は、1984年10月に日本作物学会において併催された国際作物学シンポジウム以来、日本作物学会が中心となってアジア諸国の作物学会に働きかけ、アジア作物学会を結成し、その事業としての今回の第1回大会にこぎつけたものである。その間における日本作物学会の関係者の尽力については高く評価されてよいであろう。

第1回は韓国での開催となったが、これは折よく韓国作物学会の創立30周年に当たったこともあり、韓国側の熱意により実現した。会場のオリンピックパークテルは、もとオリンピックユースホテルと呼ばれていたもので、名前の通り1988年に開催されたソウルオリンピックの際の選手の宿舎で、なかなか立派なものであり、周囲にはオリンピックで使用された競技場を見渡すことができる。

会議の日程は、9月24日の参加登録及び委員会に始まり、25日に開会式、メインシンポジウム及び歓迎パーティーが行われ、26日はミニシンポジウム、一般講演、ポスターセッション及び若手フォーラム、27日は韓国作物学会の30周年記念シンポジウム、28日はエクスカージョン、そして29日はオフショナルツアーであった。

メインシンポジウムは「アジアにおける低投入持続型作物生産システム」のテーマで、金韓国農林水産次官の基調講演を始めとして9題の講演が行われた。ミニシンポジウムは4会場に分かれ、それぞれ「最大収量のための生態生理学と作物改良」、「モデルリモートセンシングによる作物の生育・収量管理の改良」、「作物生産に関わる根系の発達」、「生化学及び栽培学からみた内的及び外的な作物生育制御」のテーマで、予定されていた講演数は合計24題であった。その他の予定講演数は、一般講演36題、ポスターセッション57題、それに韓国作物学会記念シンポジウムが8題であった。

これらの講演の進行は各会場ともほぼ順調に進められたが、中国からの講演予定者で参加できなかった人がかなり目立った。筆者はミニシンポジウムの第1会場で司会及び講演を行ったが、8題の中2題が欠席中止となり、総合討議の時間が十分に取れたという余得はあったものの、いささか心の満たされないものが残った。全体的な講演の内容については、多くを聴けなかったので確かなことは言えないが、玉石混交といった感じであった。また、筆者を含めて会議用語としての英語による表現能力の問題が痛感させられた。

韓国作物学会創立30周年記念シンポジウムでは、李会長の挨拶、来賓の祝辞に続いて、永年にわたり韓国の作物学会あるいは作物学の発展に貢献した多数の方々に対する表彰が行われた。シンポジウムは統一系品種による韓国緑色革命で著明な許ソウル大名誉教授の「発展した社会における作物への需要の変化に対応した作物研究」と題する特別講演があり、大きな感銘を与えた。それに続いて日本からの参加者も加わった講演が行われた。

大会参加者の数は、事務局の記録によればアジアの8カ国から合計527人であり、その内訳は、韓国406、日本96、台湾10、フィリピン5、中国5、タイ3、マレーシア1、インドネシア1であった。主催国である韓国を別格とすれば、大多数が日本からの参加者であり、その他はそれぞれの国の作物学会の代表者が出席したというような印象を受けた。中国からの不参加者が多かったことも、それなりの事情があるにしても残念なことである。今後、回を重ねるにつれて参加国数も参加者数も増加していくであろうが、多くの国の研究者にとって参加のための費用がかなりの負担になっていることも留意しておくべきであろう。そんな中で、数カ国の若手研究者による若手フォーラムが開かれたことは、第2回大会以降の若い研究者の参加を励ます意味でも意義深いものと思われる。なお、若手フォーラムの内容については東京農工大の大川泰一郎氏が別途報告する。

韓国の9月はよい季節である。初日には台風の影響があったものの2日目からは快い秋の日和となっ

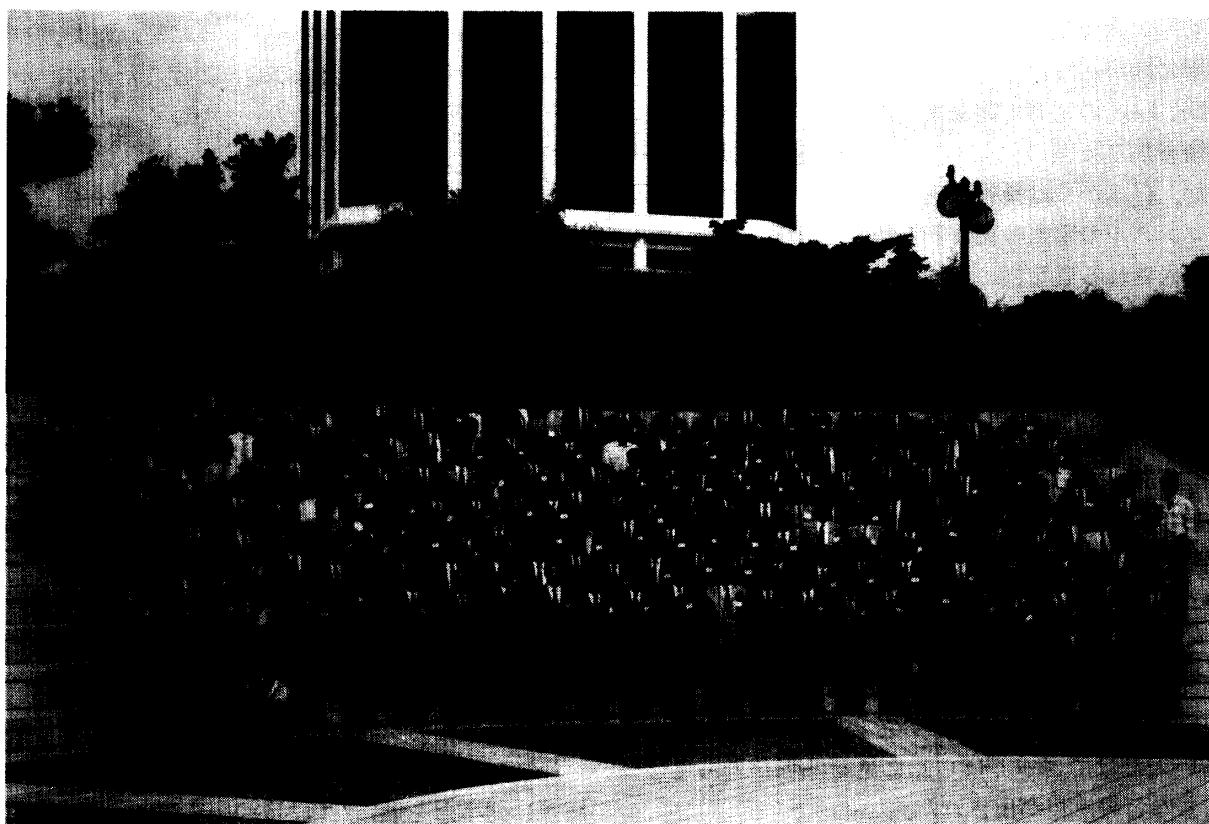
た。韓国の発展には目ざましいものがある。ソウルオリンピックの前後には、世界中でもっとも変化が激しい国と言われていたが、ソウルの建築や地下鉄などを見ると当時の勢いがなお継続しているような印象を受けた。ホテルのサービスなど若干の違和感を覚えた点もあったとはいえ、日本国内にいるような錯覚を感じたこともあり、中国あるいは東南アジアの国々とは大きな差がある。筆者は行かなかったが、大会のエクスカージョンや独自の韓国国内旅行に行かれた方々は、おおいに楽しまれたことであろうと想像する。

本大会に関する今後のスケジュールとしてはプロシーディングズの刊行がある。一般講演及びポスターセッションで発表された論文は1992年中に印刷される予定であり、順調にいけば、おそらくこの記事が読まれる頃には読者の手元に届いているものと思われる。また、メイン及びミニシンポジウムの論文は1993年の6月に刊行される予定である。この

ミニシンポジウムのプロシーディングズには、一般講演及びポスターセッションの中の関連論文を一部取り入れることになっている。

次回の第2回大会は3年後の1995年に日本で開催されることになり、さらに、第3回大会は1998年に台湾で開催される予定である。

今回の大会は、若干の不十分なところがなかったわけではないが、初回であることを考えればむしろ大成功であったと言えるであろう。それには、韓国の作物学会が創立30周年記念に向けて盛り上がったことが大きな要因の1つとなっている。この点について、李会長、権事務局長を始とする韓国側関係者の精力的な活動に対して深く敬意を表したい。次回はいよいよ日本で開催される。アジア作物学会が将来順調に発展していくか否かは、第2回大会のあり方に懸かっているように思われる。3年後を目指して怠りなく準備を進めていく必要がある。



한국 작물학회 30주년기념 및 제1회 아시아연합회 국제심포지엄

The First Asian Crop Science Conference & The XXXth Anniversary Symposium of the Korean Society of Crop Science
September 24-26, Seoul, Korea